

童話 二 題

水 谷 年 惠

小人の踊り

正直爺さんが山へ柴刈りに行きました。柴を刈つてゐる中に眠くなつたので、草の上へころりと横になつて、ぐう／＼と寝てしまひました。

大分たつてから眼を覺すと、驚きました。もう夜中になつて圓いお月様が、晝間のやうにあかるく照らしていらつしやいました。

「こりや大變、大變、婆さんが心配してゐるだらう。」

と、正直爺さんは急いで起き上りました。すると、何處からか、

ビイビイ、ポコボン、ドンドロン。

と面白さうな囃の音が聞えて來ました。爺さんは、「はてな、何だらう。」

と言つて、囃の聞えて來る方へ行つて見ました。すると、少し平になつた叢の上で、大勢の小人が圓陣を作つて、樂隊に合せて踊りを踊つて居りました。

ビイビイ、ポコボン、ドンドロン。

ビイビイ、ポコボン、ドンドロン。

赤い帽子、白い帽子、緑の帽子、青い服、黄色い服、水色の服、色々の色の帽子、色々の色の着物を着て、小人は面白く踊つて居ります。

ビイビイ、ポコボン、ドンドロン。

ビイビイ、ポコボン、ドンドロン。

小人達は首を振つたり、手を拍つたり、飛んだり跳ねたり、それは／＼面白い踊りを踊つて居ります。

正直爺さんはとう／＼たまらなくなつて、踊りながら小人の圓陣の中へはいりました。小人達は、

「おや。」

「おや、おや。」

と驚きましたが、正直爺さんがあまり面白さうに踊るので、皆喜んで前よりも、もつ／＼愉快に踊りました。そして皆で、

爺さんよう來た、さあ踊ろ、

今夜はよい晩、好きな晩。

爺さんよう來た、さあ踊ろ、

今夜はよい晩、好きな晩。

と歌ひました。正直爺さんは大變喜んで自分も一

緒になつて、

爺さんよう來た、さあ踊ろ、

今夜はよい晩、好きな晩。

爺さんよう來た、さあ踊ろ、

今夜はよい晩、好きな晩。

と歌ひました。

その時鶏が、コケコッコウと鳴きました。すると、小人達は、

「あれ、」

「もう朝だ。」

と言つて、踊るのを止めてしまひました。そして行列を作つて、ぞろ／＼と谷間の方へ歩いて行きました。正直爺さんも小人達の行列の後について谷間の方へ歩いて行きました。

谷間に一花、白い百合の花が咲いて居りました。

小人はその白い百合の花の中へ、ぞろ／＼と這入つて行つてしまひました。正直爺さんは、

「はて、不思議なことがあればあるものだ。」

と言つて、驚いて其の花を眺めて居りましたが、
ぽんと膝を打つて、

「さうだ、此の花を婆さんへ土産に持つて歸らう」
と言つて、その百合の花を折採りました。

夜があけました。正直爺さんは百合の花を一花
お土産にして、うちへ歸りました。

其の晩のことです。婆さんが手桶の中へ挿して
あいた百合の花の中から、ゆうべの小人が、ぞろ
／＼と出て来て、爺さんの家のお庭で圓陣を作つ
て、又踊りを踊り出しました。今夜もいゝお月夜
で、まるで晝間のやうにあかるく見ええました。樂
隊は笛や太鼓を鳴らして、

ピイピイ、ポコボン、ドンドロン。

ピイピイ、ポコボン、ドンドロン。

と囃したてました。村の人達は、皆眼を覺して、
「やあ。」

「面白いぞ。」

と言つて、正直爺さんのうちのお庭へ集つて來ま
した。そして小人達と一緒になつて、皆で歌を歌
ひながら踊りました。

正直爺さんよい爺さん、

お山の小人とさあ踊ろ。

正直爺さんよい爺さん、

お山の小人とさあ踊ろ。

正直爺さんは嬉しくて、嬉しくてたまりません。

自分も小人や村の人達と一緒になつて、

正直爺さんよい爺さん、

お山の小人とさあ踊ろ。

正直爺さんよい爺さん、

お山の小人とさあ踊ろ。

と歌ひながら踊りました。

その中に鶏が、コケコツコウと鳴きました。す
ると、小人達は、

「あれ、」

「もう朝だ。」

と言つて、踊るのを止めて、行列を作つて、ざろく〜と手桶に挿してある白い百合の花の中へ這入つてしまひました。村の人々は正直爺さんに向つて、

「お爺さん、有難う。お蔭で面白う御座いました」

「お爺さん、こんな愉快なことはありませんでしたよ。どうも有難う。どうも有難う。」

と言つて、めい〜の家へ歸りました。

隣のうそつき爺さんは、自分も白い百合の花が欲しくなつて、正直爺さんに、

「その白い百合の花は何處に咲いてゐたのだね。」
とたづねました。

「此の花かね、これはいつも柴刈りに行く山の谷間に咲いてゐたのだよ。」

と正直爺さんが教へました。其處でうそつき爺さ

んは急いで山の谷間へ行つて見ました。よい鹽梅に白い百合の花が一花咲いて居たので、折つて歸りました。そして、村中駆廻つて、

「ちよい、みんな、今夜俺のうちへお出で、小人の踊が俺のうちの庭であるんだよ。」

と叫んで歩きました。村の人々は喜んで、

「又今夜小人の踊りがあるのだつて、うまいね、嬉しいね、みんなで行かうよ。みんなで踊らうよ」と言つて、夜になるのを待つて居りました。

夜になりました。村の人々は、みんなうそつき爺さんの家の庭へ集りました。今夜は空が曇つてゐて、お月様のお顔が見えません。うそつき爺さんが、

お山の小人出て来い出て来い、

みんなが来たから、はよ出る、はよ出る。

と歌つて催促しました。けれども小人は一人も出て来ません。いくら待つても小人が出て来ないの

で、うそつき爺さんは怒つて、

くそ百合、馬鹿百合、へつぼこ百合、

熊蜂、小蜂に螫されて泣いてろ。

とどなりました。すると、百合の花から、

ブーン

と元氣の好い音がして、澤山の熊蜂が飛出しました。さあ大變、

ブーン

ブーン

と飛出した熊蜂が村の人々の顔や手をチクリ〜と螫しました。うそつき爺さんの顔や手は、特別に大きな熊蜂が、チクリ〜と螫しました。村の人々は、

「わあつ、逃げる〜。」

と言つて、逃げていつてしまひました。

それからうそつき爺さんは、もううそをつきませんでした。

あはて者の三太郎

あはて者の三太郎が、夕方歩いて來ました。すると川がありました。川岸に石地藏が立つてゐて、その傍で、一人の子供が、

「あゝん、あゝん。」

と泣いてゐました。あはて者の三太郎は、

「あゝい、なぜ泣く。」

と言つて、石地藏の頭を撫でてやりました。子供は

「川があつて、かへれないよう。」

と言ひました。あはて者の三太郎は、

「よし、渡してやらう。負んぶしな。」

と言つて、あはて、石地藏を負んぶして、じゃぶ〜と川を渡りかけました。うしろで、

「あゝん、あゝん。」

と前よりも大きな聲で、子供が泣きだしました。

三太郎は、脊中の石地藏に、

「泣くんぢやないよ、泣くんぢやないよ。」

と言つて、川の真中まで行くと、石ころにつまづいて、ぢやぼんと轉んでしまひました。轉んだ拍子に、脊中の石地藏が水の中へおつこつてしまひました。あはて者の三太郎は、

「大變だ、大變だ。」

と言つて、水の中をひつかき廻しましたが、子供は居りません。三太郎は眞青になつて、

「助けてくれ、助けてくれ。」

と大聲をあげて叫びました。

三太郎の聲を聞きつけた人が、駆けだして來ました。

「どうした、どうした。」

「た、大變だ、大變だ。」

「何が大變だ。」

「子供が川の中へおこつた。」

「何處へ、何處へ。」

「こ、この邊だ、この邊だ。」

其の時、向ふの岸で、

「あゝん、あゝん。」

と子供の泣くのが聞えました。するとあはて者の三太郎は、

「助かつた、助かつた、子供はもう岸へあがつた」と言ひました。

倉橋教授は、今夏、左記に講演旅行に赴かれます。

七月

二十一日——二十三日

二十九日——三十一日 静岡縣伊東 名古屋市

八月

四日——六日 静岡縣川崎町

八日——九日 山口縣虹ヶ浦

十日——十一日 神戸市

十四日——十五日 銚子

十八日——二十日 松本市

二十七日——二十九日 桐生市

九月 七日——八日 松江市